

明応二年（一四九三）以前

小田原北条家初代の伊勢宗瑞（北条早雲）は、室町幕府政所執事伊勢家の庶流である備中伊勢家の出自で、長らく永享四年（一四三三）生まれとされていたが、近年は康正二年（一四五六）生まれとする説が有力である。父は盛定、母は伊勢家嫡流貞国の娘である。在世中に北条名字は称しておらず、実名は盛時とする説がほぼ確定している。また早雲は庵号であり、宗瑞が法名である。北条早雲は有名だが俗称というわけであり、以下は宗瑞で統一して呼称する。元服は文明二年（一四七〇）か三年との推定があり「黒田二〇一九」、発給文書の初見は文明三年六月二日付で備中国荏原郷（岡山県井原市）の法泉寺に与えた禁制である「小田原北条四〇」。

宗瑞の父盛定は、婚姻によって伊勢家嫡流と密接な関係にあり、幕府内での地位も高かった。この地位から駿河守護今川義忠と提携するに至り、宗瑞の姉である北川殿が文明元年以前に、義忠に嫁ぐことになったとみられる。

文明八年（一四七六）二月、義忠が遠江に遠征した帰途、塩買坂（菊川市）で土民の不意打ちを受けて戦死した。嫡子の龍王丸（のちの氏親）は六歳とまだ幼かったため、一族の小鹿範満が家督につこうとした。宗瑞はこの問題を調停するために駿河に下向したともいい、だとすればこれは父盛定以来続いていた今川家との提携関係に基づいていたということになるが、確実な史

宗瑞発給文書の
初見

料に欠ける。

このとき、駿河には扇谷上杉定正の家宰太田道灌や堀越公方足利政知の重臣犬懸上杉政憲らが出兵した。道灌の主人定正は小鹿範満の外戚であり、範満支援の目的があったとみられる。結果として、範満優位で事態はいったん收拾した。龍王丸成人までは、範満が家督の地位を認められたという。宗瑞は内紛を収めた功により、駿河国下方荘(富士市)を与えられ興国寺城(沼津市)に在城したというが「今川記」、こうした経緯からみれば、のちに範満が戦死して氏親が名実ともに駿河国主となった際の出来事と混同されている可能性が高い。

文明十年(一四七八)二月、前將軍足利義政と九代將軍義尚父子が細川聡明丸(のちの政元)亭を訪問した際の御伴衆に「伊勢八郎盛時」が見え「後鑑」、仮名八郎は父・兄等との混同で、宗瑞であろうとされる「黒田二〇一九」。同十三年九月、宗瑞は分一銭を室町幕府に納入し、徳政令の適用を受けている。同十五年十月には將軍義尚の申次衆に加えられており「慈照院殿年中行事」、將軍側近として高い地位を得ていた。

氏綱誕生
宗瑞駿河下向
小鹿範満を討つ

文明末年、宗瑞は小笠原政清の娘と結婚し、文明十九(一四八七)に嫡子(のちの氏綱)が誕生している。同年四月にも將軍義尚の申次として活動しているが「親長卿記」、同年秋には駿河に下向したとみられ、甥の今川氏親に協力して兵を挙げ、十一月九日には小鹿範満を討つて、氏親を名実ともに駿河国主の地位に据えることに成功した。範満を後援していた太田

道灌が、前年主人定正に謀殺されていたことも、範満打倒には有利な条件だったであろう。

前述の通り、宗瑞はここに至って駿河国下方荘、興国寺城などを与えられたとみられるが、興国寺城については下方荘との位置関係では疑問の余地がある。なお、宗瑞の居所としては駿河石脇城(焼津市)も知られている「小田原中世二八九」。駿河下向前後のことであろうか。

いずれにせよ、宗瑞は駿河に拠点を得ることとなった。ただし、幕府との密接な関係は保ち続けていたようで、延徳三年(一四九二)五月には、氏親へ奉行人奉書が下されるのを取り次いでおり「北野社家日記」、明応元年(一四九二)五月十九日～同二年正月十七日の間に成立した「東山殿時代大名外様附」に、奉公衆の一番衆として名を連ねている。つまり、宗瑞は幕府奉公衆の身分であり、実態としては今川家の麾下に入ったといえるのである。

なお、「東山殿時代大名外様附」には「新九郎」とあり、同三年九月の遠江出陣に際しては「平氏早雲」と見えるので「円通松堂禪師語録」、宗瑞の出家時期は明応元年五月～同三年九月の間となる。宗瑞は、在京時には禅宗との関わりも深く、はじめ建仁寺、ついで大徳寺に参じている「玉隠和尚語録、東溪宗牧語録」。

明応二年(一四九三)

この年、宗瑞は伊豆へ侵入し、堀越公方足利茶々丸を攻撃した「勝山記」。この行動は、かつ